

男性とスカート考 (2)

Men and skirts (2)

北方 晴子

Haruko KITAKATA

要旨

男性とスカートに関する論考への手掛かりとすることを目的として、研究ノート「男性とスカート (1)」(2019・1)では、「男がズボン、女はスカート」定説の誕生から20世紀前半までの男性用スカート風衣装について整理した。引き続き、今回は、1960年代から1990年代の男性用スカートに関する記述に焦点を当てた。

1960年代は、若い男性の衣装は華やかになり、ファッションへの関心を高めていった。ユニセックスファッションも登場し、男性用スカートを提案するデザイナーも登場したが、ファッションアイテムとして認識されるまでには至らなかった。その後、1980年代に入ると新たな男性像の出現とともに、新しいスタイリングで男性用アイテムとして少しずつ社会に受け入れられていくこととなる。

●キーワード：メンズファッション (men's fashion) / スカート (skirts) / 服飾史 (fashion history)

はじめに

ヨーロッパの服飾史において、男性用スカート風脚衣の歴史は非常に古く、古代ギリシア時代の男性が着用した膝丈のキトン chiton や古代ローマ時代に男性が着用したトゥニカ tunica に遡る。そして15世紀ゴシック様式期に、男性に短い上着ブルポワン pourpoint が登場し、脚衣ショース chausse が現れる。この時期において、ファッションにおける男女の性差が強調され、「男はズボン、女はスカート」という定説が確立していった。したがって、スカートが女性の象徴、ズボンが男性の象徴とする概念は、ヨーロッパも服飾史における中世ゴシック期からルネサンス期の服装における慣習に基づいたものであった。

一方、ヨーロッパの各地に見られる男性用民族衣装の中にもスカート風衣装は見られた。特に、東西ヨーロッパ遠隔地では原初的な形としてのチュニック形式の男性民族衣装があった。スコットランドの男性用キルト kilt や、スカンジナビア半島の北部に定住するラップランド人のチュニック風男性民族衣装や東欧ハンガリーの東南部で牧夫たちが着用する幅の広い緩やかでふくらはぎ丈のスカート状ズボンのガチャ gatyá などがそれである。

このように、民族服の中に存在する男性用のスカートやチュニックは、いずれも歴史的、あるいは風土的な環

境の中で成立し、今日に至っている。

I 男性スカートの復活—1960年代と男性用スカート—

第2次世界大戦後の1960年代、戦後のベビーブーム世代がティーンエージャーとなり、若者が台頭した。彼らは独自のライフスタイルを追求し、ファッションにおいても若者独自のアイテムを採用していった。それが1960年代に世界中で流行したミニスカートである。男性ファッションにおいてもこれまでには見られなかった鮮やかなシャツやパンツを着用し、カラフル化が始まった。いわゆるピーコック革命 Peacock Revolution¹⁾である。そしてファッションのユニセックス化が進む。イヴ・サン＝ローラン Yves Saint-Laurent (1936-2008) は、1967年に女性用パンツスーツの発表に続き、1968年サファリスーツを提案した。

そのような時期、一部のデザイナーが男性用のスカートを提案するようになる。フランス人デザイナーのジャック・エステレル Jacques Esterel (1917-1974)²⁾ は、1966年「スカートスーツ」と呼ばれる上着と男性用スカートを発表した(図1)。「スカートスーツ」は、米国の合成繊維を使用したグレーと黒とボルドーのジャケットは、スコティッシュキルトにインスパイヤーされたものであった。このデザインは後に、ジャン・ポール＝ゴ



図1 スカートのスーツ 1966年

ルティエ Jean=Paul GAULTIER (1952-) ³⁾ の1985年春夏コレクションで発表した影響を与えることとなる。その後、1970年代にユニセックスローブをデザインした。

また、アメリカ人デザイナーのルディ・ガーンライヒ Rudi Gernreich (1922-1985) ⁴⁾ は1970年に男性用と女性用の黄色のミニスカートデザインをした。彼は、デザインの多様化のみならず、身体を強調した作品が多いことで知られる。第2次世界大戦後、女性の権利拡張、同性愛者の解放運動などに刺激を受け、女性の性を解放したミニスカートやパンツスタイルなど身体を解放したデザインが数多く誕生させた。自由な身体を受け入れる環境が進む現在の基礎に繋がったといえよう。

他方、イギリスでもテキスタイルデザイナーのジョー・カゴン Joe Kagon は、1966年にひざ丈スカートを提案した。

そして、当時のイギリスでファッション・アイコンとして君臨していたのが、ロックバンド、ザ・ローリング・ストーンズ The Rolling Stones である。1962年4月のロンドンで結成以来、現在でも第一線で創作活動をしている彼らは、男性のファッションに限らず、スカーフを男性アイテムに取り入れるなど、頭の前からつままでディテールにこだわり、美しさを極めていた。中でもボーカルのミック・ジャガー Mick Jagger (1943-) は、1969年、ブライアン・ジョーンズ Brian Jones (1942-1969) ⁵⁾ の追悼式で、リボンが付いた、腰にギャザーを寄せたフェミニンな印象の白いチュニックを着ていた。シャツをデザインしたのがピーコック・レボリューション以後のロンドンファッションの先導者でもあるマイケル・フィッシュ Michael Fish ⁶⁾ で (1940-2004) あった。ミック・ジャガーは、マイケル・フィッ

シュがデザインしたギャザーを寄せたシャツに刺繍入りのロングベストやロングジャケットにパンツを合わせるなど、現代の女性的なイメージやシルエットの服を度々着用していた。

このように、1960年代はピーコック革命やユニセックス化によって、男性ファッションの女性化が進み、男性用スカートが服飾史上、復活した。

II 現代的な男性スカートスタイル

伝統的な男性ファッションのイメージに破綻を生み出しと解釈される1980年代は、男性ファッション史においても重要な時代となっていく。相次ぐ男性用のファッション誌の創刊やそれまで婦人服を手掛けていたデザイナーがメンズファッションにも進出し、コレクションを行うなど、男性ファッションが開花していった。

1984年、春夏シーズンにおいて、ジャン＝P・ゴルティエが初のメンズコレクション「オム・オブジェ homme objet」を発表した。それは“着飾る男”の存在を明らかにしたものであった。そこには、鍛えあげられた肉体の黒人男性モデルが、キルティングのロングベチコートを穿いている姿があった(図3)。黒光りしたとも言える男らしい肉体美にベチコートという一見アンバランスな組み合わせこそが、新しい男性ファッションとして提案された。この時期、ゴルティエ自身も、髪は短く借り上げてはいたものの、髪色はブロンドに染め、スカートを穿いて、コレクションのラストに登場していた。

かつて、「生産や労働」の領域に位置づけられ、当たり前のようにズボンを穿いていた男性に、1980年代になると、女性だけが穿くと考えられていたスカートがコレクションで発表されたのである。

当時、イギリスでは男性ファッションを扱った雑誌『ザ・フェイス The Face』⁷⁾ 『アイディー i-D』⁸⁾ 『アリーナ Arena』⁹⁾ などが出版され、「ニュー・マン New men」という概念が明確になってきた。

ニュー・マンとは、消費する快楽に酔いしれたセクシストではないポストフェミニストの男性のことで、自分の外見を意識し、世話好き、育児好きな一面に触れることに抵抗を感じていないことを指す。「ニュー・マン」に顕著に見られるように、これまでの男性イメージは大きく変化していった。

ニュー・マンに見られる新しい男性イメージを創り上げるプロモーションには、雑誌のスタイリストたちが重要な役が関わっていた。

なかでも、当時、スーパースタイリストとしての異名があったレイ・ペトリ Ray Petri (1948-1989)¹⁰⁾ は1980年代半ばのロンドンで活躍をしていた。彼は雑誌『i-D』や『The Face』で、スカートを着る男性を用いたファッションスタイリングの数々は、新しい男性イメージを体現していった。

最初の作品はフォトグラファー、マーク・ルボン Mark Lebon (1957-) ¹¹⁾ 撮影の『i-D』1984年7月号にみられ腰巻をまとった男性の姿であった。サンダルを履いたその足元は、古代の男性に見られるような力強さが感じられる。そして、腰巻の上には膝丈のコート風の上着を合わせている。その後、同年10月号では海軍のジャケットにスカートを合わせた男性の姿が登場した。海軍ジャケットにみる優れた男性らしさだけでなく、着用したモデルががっちりとした体格を強調し目立たせていた。また、モデルの固く握りこんだコブシや強く何かを主張するポーズと表情はスカートが示す前衛的な感覚を相殺するタフで力強い男性のイメージがある(図2)。

そして、彼の最も有名で記念すべきスタイリングは『The Face』1984年11月号に登場したものである。撮影はフォトグラファー、ジェイミー・モーガン Jamie Morgan¹²⁾ であった。黒い革のスカートに、シャツの腹部のボタンを止めず、その上から黒いジャケットをはおっている。ジェイミー・モーガンは、仲間の写真家、ジャーナリスト、モデル達と協力して、男性が新たなコーディネートをするを目的に、ときにはゲイ社会のサブカルチャー・ファッションとしての定番スタイルなども織り交ぜながら、最新の情報を満載した雑誌を創り上げ、世間の反響を呼んだ。

特に、R・ペトリが扱う誌面は独創性に富んでいた。彼の発想は折衷的で、テーラード、デザイナーズブランド、民族衣装、スポーツ・ウエア、時代衣装、サブカルチャースタイル、ストリートなど手当たり次第に様々な要素を入れた。その面白さは既成概念にとらわれず、自由に、新しいことにチャレンジし続けた。まさに、ファッションを使って、新しい概念を表現していった。様々なスタイリングに挑戦したりすることで、従来の男性らしさに対する固定概念やファッションそのものの捉え方を覆した。ファッションにおけるスタイリングは重要になっていく。スポーツアイテムとのミックスでコーディネートすることなどが見られるようになった。今では当たり前だが、それまでだれもやっていなかったことを行って



図2 右左
レイ・ペトリのスタイリング、マーク・ルボン撮影、「i-D」1984年

いった。ゴルティエが最も気に入っていたスタイリストであったことから、男性にスカートを穿かせるというR・ペトリの発想が、後に、ゴルティエへの影響は計り知れない。

その後、ジェンダーが曖昧となりつつあった1990年代は、男と女の垣根がなくなっていった。ゴルティエはそうした時代にファッションにおいて男女の境界線を壊した最初のデザイナーである。

そうした時代にメトロセクシャル metrosexual と呼ばれる新しいタイプの男のイメージである。1994年、イギリス人ジャーナリストのマーク・シン普森 Mark Simpson によって「インディペンデント誌」に登場した。当初、メトロセクシャルは1990年代半ばに伝統的な男性らしさに対する消費主義の代価を風刺するための言葉として表れたにも関わらず、消費者文化にしっかりと根を下ろしたメディア現象になった。2004年には『メトロセクシャル』が発売されたこともあり、2000年代には広くその言葉は知られることとなった。一般的には「都会生活を営み、性的にストレートで自分の女性的な面をすすんで受け入れる。ときにはそれを強く望んでいる男性」と解釈されている。プロサッカー選手として世界的に有名となったデイヴィッド・ベッカム David Beckham (1975-) ¹³⁾ は、メトロセクシャルのアイコンとしてのイメージそのものであった。ネイルを塗り、髪を編んで、そして度々、妻や家族を同伴してメディアにも登場し、写真に納まった。時に、スカートを穿くこともあった。

そして、ファッションの世界では、ゴルティエが、1996～1997秋冬メンズコレクションで、男性用スカートを提案した。その後も男性用スカートを発表したデザ

イナーは続いた。

1990年代後半はインターネット上において、医学的な見地や社会的な立場から男性にスカートを奨励し、男性衣装について議論するグループ MODERN MEN'S DRESS REFORM (MDRP) が創設された。中でも最も興味深いのは、BRAVEHERTS AGAINST TROUSER TYNANNY (ズボンに対する反対) BBTT である。ズボンの独裁から男性を解放しようというものである。そして、キルトやほかのアイテムを採用しようというものである。

そして、イギリスを拠点にした会社ドレスとスカートを穿いた男性 Men IN DRESSES AND SKIRTS (MIDAS) は、男性用にスカートを奨励した。エリック・ギル Eric Gill (1822-1940)¹⁴⁾ を彷彿させる。このほか、ドイツやスイスにも類似したグループが登場した。

日本でも、1990年代に入り、若い男性にとってお洒落することが定着し、お洒落することが普通になり、服だけには留まらず、肌やヘアスタイルといった身体そのものへの関心が高まり始めた。眉毛を整えたり、薄化粧をしたり、ある種女性化しはじめた現象が出てきた。当時、男性ファッション誌でも、盛んに眉毛を整える特集やヒゲや体毛を処理する特集が組まれるようになり¹⁵⁾、そこには毛深く野性的な男性イメージはなく、少年のような、中性的なイメージの男性の存在があった。女性文化を抵抗なく受け入れ、男性だからカッコいいだけでなく、スマートで美しくありたいという思いが新たに付け加えられたのである。そうしたことから、全体的にユニセックス化が進んでいったと言える。

ストリートにおいても、一見すると女性と見間違いう格好をした男の子が登場した。ピアスやネックレスを飾るなどジェンダーレス化が進んでいた。そうした男の子は当時「フェミ男」「カマ男」と呼ばれ、女の子の可愛らしさを志向した。そして、彼らの一部は好んでスカートを穿いた。

むすび

1960年代から、女性の自立が見られると、女性のスカートは徐々にズボンに置き換わってきた。と同時に、ファッションにおける性差の意識にも変化が見られ、ユニセックスファッションが普通となり、新しい時代を迎えた。そして、その当時に登場した男性用スカートは、歴史的に考えると、男性の服装にスカートが復活したことになるが、実際に現在のようなファッションアイテム

になるまでにはならなかった。それは、当時の男性用として提案されたスカートは民族衣装そのものの形や女性が穿く膝丈のスカート、そしてミニスカートそのままの形であり、決して男性用に新たにデザインされたものではなかったからではないだろうか。

そして、1980年代に女性の社会進出が加速すると、女性は男性社会で成功するために、ファッションでは男性と同じように肩幅を大きく見せた肩パッド入りのスーツに身を包み、化粧においても意思が強そうに太い眉毛をかいた。一方の男性は女性の領域であったファッションで着飾ることを始め、ファッション消費を楽しむようになった。すなわち、女性の自立が進むにつれて服装における性差意識は新しい時代を迎えたのである。そうした時代に提案された男性用スカートは、それまでのような女性用のスカートの模倣ではなく、新たなデザインとしての男性用スカートと新しい男性イメージであった。例えばゴルティエが提案した鍛え上げられた肉体に合わせた本来なら女性の下着とも考えられるベチコートであったり、当時のスタイリスト達が提案した古代の男性のようなサンダル姿にスカートや、軍服を合わせたスカートである。彼らはスカートを着用しながらも、自身の体格やポーズで力強い男らしさを示している。すなわち、スタイリングという方法で、新しい現代的な男性用スカートとして提案していったのである。そこには、1960年代の男性用スカートの提案と違い、1980年代の男性用スカートはスタイリングによって新しい表現を行い、徐々に男性用のファッションアイテムとして受け入れられていったと考える。

そして、1990年代に入ると、一部ではあるが、ラグジュアリーなブランドの世界でも男性用スカートが発表されるようになった。もはや、男性服の女性化ではなく、新たな男性用のファッションアイテムとして考えられ始めたといえるのではないだろうか。

2000年代以降には、コレクションにも男性モデルがスカートをはいたショーが披露されている。ヨウジヤマモト Yohji Yamamoto は、2013-14年秋冬メンズコレクションでは、労働服やつなぎといった男性的な日常着に加えて、女性的なスカートが登場した。男性服におけるボトムスのあり方にアプローチしたコレクションを披露した。トム・ブラウン THOM BROWNE¹⁸⁾ の2018年バリメンズ春夏コレクションでは、男性モデルの多くがスカートををはき、全員がハイヒールを履いて登場した。シャツワンピース、ショート、ロングなど様々なシル

エットのスカートが登場した。ラストルックには、前からみると男性用タキシード姿、後ろから見るとウェディングドレス姿というコレクションの最も象徴的なジェンダーレスな服が登場した。まさに、男性ファッションと女性ファッションが融合したコレクションである。ハイブランドでも男性用スカートが登場してくると、若物だけではなく、大人の男性にも受け入れられやすいと言える。

このように、ジェンダーレスファッションは度々コレクションに登場してくるようになり、ジェンダーの隔たりを大幅に超え始めている。そこには、「何故、スカートは女性だけのものなのか」「何故、ハイヒールは女性だけのものなのか」「なぜ、細いウエストは女性だけのものだけなのか」など、当たり前のように社会の中で決められたファッションの規範へ問いかけていると考える。

2017年6月、イギリスで校則に反抗してスカートをはいて登校した男子生徒たちが、BBC放送やインターネットで話題になった。原因は、温暖化による猛暑と関係している。暑い夏でも長ズボンを履かなければいけないとする校則に抗議して、スカートを履いて登校した男子生徒たちに対し、中学校は彼らの主張を一部聞き入れ、次年度の夏から半ズボンで授業を受けてもよいことになった。男子生徒たちは、当初、猛暑に耐えかね、半ズボンを履きたいと学校側に訴えたが、校則を理由に却下されたため、女子生徒はスカートをはいて脚を出せるのに、なぜ男子生徒は半ズボンを履けないのかと反論したところ、学校側にスカートだったら、はいてもよいと言われたことに反発し、翌日男子生徒たちは、友人や姉妹に借りた制服のスカートを着用して登校したというものである。

最近では日本でも学校制服において女子生徒がスカートかズボンを選ぶことが出来る学校も増えつつある。「性別問わず選べる」制服として、性別に関係なくスラックスやスカート、ネクタイ、リボンまで自由に選べるというものである。

将来は、それが逆転し男子生徒もスカートかズボンを選択できる時が来る可能性もある。

そして、昨今は「スカート男子」と言われるストリートスタイルにも男性用スカートが登場し始めた。

近年のグローバル社会を迎え、世界各地のテキスタイルが進化を遂げ、色や図柄の多様性を生み出し、民族衣装にも関心は寄せられている。エスニックファッション感覚で、民族衣装に見られるような男性がスカート形式

のファッションを楽しむ時代はすぐそこまで来ているのかもしれない。そして、男性が社会的に女性に従属する時代が訪れたとしたら、性差意識は逆転し、男性のスカートが一般化することも考えられないことではない。

今回の1960年代から1990年代までのスカートに関連する記述は、まだ一部であるため、さらに資料を読み込んでいく必要があると考える。

注

- 1) ピーコック（孔雀）革命は、1967年に米国の博士ディビターが提唱した、男性ファッションの革命を指す。男性ファッションのそれまでのダークトーン中心から、もっと色彩を取り入れて美しく着飾ろうとする運動で、孔雀の雄が雌よりも華やかな色彩をもっていることから命名された。
- 2) 1917-1974 フランスのスタイリストである。1953年にブティックを創設した。
- 3) 1976年、フランスで自身のブランドでプレタポルテコレクションデビューした。2015年春夏コレクションを最後にプレタポルテから撤退し、香水とオートクチュール部門のみとなった。1980年代を代表するブランドで、フランスのファッションの中心を担ってきた。ファッション界の異端児と呼ばれ、性別やジャンルを超越したコレクションやアバンギャルドでパンクの精神を持ち合わせた数々のアイテムを提案してきている。
- 4) 1922年～85年。パリ生まれ。バレンシアガ、ジヴァンシーのモデルを経て、1964年にプレタポルテのコレクションを発表。プレタポルテ時代の先駆者の一人となった。
- 5) ザ・ローリング・ストーンズの元ギタリスト兼リーダー。グループの中でも、お洒落として知られた。
- 6) 1966年に自身のブティック「ミスター・フィッシュ」を創設した。当時のロンドンの若者ファッションのストリートではなく、貴族や貴族階級をお客としていたセビル・ローにオープンした。彼のデザインは花柄のシャツやフリルのついたシャツなどピーコック革命を反映したものであった。1960年代から70年代にかけて著名人の服をデザインすることで注目を集めた。ブティックは1970年代半ばに閉店した。
- 7) イギリス。10～20代の若者向きカルチャー雑誌。音楽、ファッションなどはストリートの動きが中心である。ビジュアルに非常に凝った雑誌である。
- 8) イギリス。月刊。10～20代を狙ったシティマガジン。音楽やアートと結びついたファッション記事がメインである。ロンドンのストリートファッションの影響が強い。社会問題を扱った記事も掲載する。
- 9) 1986年に季刊誌としてスタートした。25～35歳をターゲットにし、売れ行きは好調だった。メンズファッション誌の先駆けとも言われる。
- 10) 1980年代既存のファッションに対抗するため、ロンドンで結成されたクリエイティブ集団バッファロー-BUFFALOの中心的存在であり、スタイリスト。彼のスタイリングは、テーラード、デザイナーズブランド、民族衣装、スポーツウェア、時代衣装、サブカルチャースタイル、ストリートファッションなど様々な要素を取り入れた独創的で全く新しいものであった。スタイリストという職業を必要不可欠な存在へと高めた。

- 11) 1957年、イギリス生まれのフォトグラファー。『i-D』『The Face』『Arena』『Vogue』など名立たるファッション誌で活躍した。ジョン・ガリアーノ、ゴルティエ、ヴィヴィアン・ウエストウッドなどのフォトグラフィーにも数多く携わった。
- 12) イギリスのフォトグラファー。伝説的なスタイリスト、レイ・ベトリとともにバッファローを共同設立し知名度を上げた。
- 13) イギリス、イングランド出身の元サッカー選手。多くの広告に起用され、ファッション・アイコンとしても注目を集めた。
- 14) イギリスの彫刻家、版画家。イギリスにおけるアーツ・アンド・クラフツ運動にも参画した。1920年から40年まで異色ある文明評論家として名をはせた。『衣装論—ズボンとスカート—』(1931)は、男女がまとう自然的人為的外皮の性格及び意義についての試論という副題で、ギルは女がズボンを穿くより、男がスカートを穿くほうがずっと理にかなっているということを述べている。
- 15) ニューヨークのファッションブランドである。2001年、ブランド「トム ブラウン ニューヨーク THOM BROWNE. NEW YORK」を設立し、2017年に「トム ブラウン THOM BROWNE」にブランド名変更した。創業者兼デザイナーの

トム・ブラウンは、1965年、アメリカのペンシルバニア州生まれ。

参考文献・図版出典

- ・石関 亮、ファッションナブル・マン、『時代を着る—ファッション研究誌『Dressstudy』アンソロジー』、財団法人京都服飾文化研究財団、2008
- ・エリック・ギル、増野正衛訳、『衣裳論』、創元社、1952
- ・北方晴子「20世紀メンズファッションと男性イメージ」『ファッションビジネス学会誌』、Vo21、2016
- ・キャリアー・ブラックマン、桜井真砂美訳、『メンズウエア100年史』、ブルースインターアクションズ、2010
- ・ジェニー リスター監修、『スウィング・シックスティーズファッション・イン・ロンドン 1955-1970』、古谷直子訳、2006
- ・深井晃子、『男が変わる女が変わる—1980年代ファッション・ノート』、Edition Wacoal、1990
- ・Andrew Bolton, Bravehearts, *Men in skirts*, V&A Publications, Lond., 2003
- ・Peter McNeil and Vicki Karaminas, *MEN'S READER*, N.Y., 2009